

「東京銀座資生堂」の誕生

——福原信三と銀座イメージの構築

序

銀座の資生堂でないと、今の人々にはピンと来ない程銀座と資生堂は離れ難い存在である。⁽¹⁾

昭和初期の経済誌が評しているように銀座に有名店は多々あるといえども、現在に至るまで資生堂はその代表格であろう。

しかしながら資生堂は一八七二年、西洋調剤薬局としての創業以来、ほぼ半世紀にわたり「東京新橋資生堂」あるいは「京橋区出雲町資生堂」などとして親しまれてきた。創業者、福原有信（一八四八—一九二四）の三男の信三（一八八四—一九四八）が経営を任せると、ほぼ一九二二年を契機にその店舗の立地は変わらなまま「東京銀座資生堂」へと表記が変わり、新橋のイメージは急速に払

拭されていくのである。この変化は当時も人々の関心を惹いたようだ。一九二五年には雑誌に次の意見が掲載されている。

銀座と言へば資生堂を聯想する者が少くないだらう。あまり遠くない前まで新橋資生堂と書いてあつたがいつの間にか銀座の資生堂になつてしまつた。新橋が東京の關門であつた頃には新橋を少し離れて居りながら新橋資生堂を稱し今また出雲町にありながら銀座の資生堂か資生堂の銀座かとまで言はせるようにしたところ福原さん唯の美術愛好者ではない。⁽²⁾

店名表記の変更は、直接的には福原信三の発案により、資生堂が、松崎天民や与謝野晶子ら銀座に縁の深い文化人ら五十二名の寄稿を得て制作した『銀座』の刊行と軌を一にしている。同書では「銀座

戸矢理衣奈

の去来」(馬場孤蝶)、「銀座の柳よ」(松山省三)、「銀座の
ランデブエツク
Rendez-Vous」(鈴木泉三郎)、「銀座の雨」(北原白秋)など執筆者
がそれぞれに銀座に対する思いを語る一方で、近代銀座を論じた最
初の冊子とされる様盆子『銀街小誌』(二八八二年)の全文や「銀座
街大観・京橋より新橋に至る銀座通りの図」といった、震災直前の
銀座に関する様々な資料が収集されている。有信や信三も寄稿し、
その銀座観や当時の銀座が抱えていた課題を明確に語っている。

同書刊行のきっかけは、後述するとおり、当時の東京市長、後藤
新平が都市計画法の下での路面改良事業の一環として銀座通りの拡
張工事を計画し、銀座の人々の意向に反して、銀座の象徴として親
しまれてきた柳の撤去等を決定したことにある。信三は、影響力の
強い文化人を含めた「銀座の声」を集結させることで、抗議の意を
示したものと思われるが、こうした形での冊子刊行の試み自体が銀
座ではじめてのものであった。本稿では『銀座』をはじめ福原信三
による銀座に関する著作を中心にして、信三の銀座観を検討すると
ともに、「東京銀座資生堂」の強力なイメージが信三により構築さ
れていく背景について銀座史とあわせて検討する。

同時に『銀座』が関東大震災前の一九二一年に刊行された点にも
留意したい。震災後、銀座はモダン都市を代表する存在として、急
速に大衆化が進んでいくが、信三による変革はそのいわば胚胎期に
行われたものだ。震災後の帝都復興計画は、後藤新平が東京市長と

してかねてから都市計画の重要性を認め、人材の育成に努めていた
ため議論を呼んだものの、比較的速度やかに実施されたとされる。銀
座についてもモダン都市が現出する直前の姿はその後の銀座を考え
る上で検討に値するだろう。そもそもモダン都市文化の現象面に
ついては多数の論考がなされてきたが、その背景を経営者の視点か
ら捉える試みは少ない。銀座が小売店の集合体である以上、そこ
には必然的に経営者の意図が存在する。なかでも銀座の都市文化を先
導した資生堂と福原信三の意向は注目に値すると思われる。

なお資生堂や福原信三に関する先行研究は、その大半が資生堂に
よるものだ。⁴⁾『資生堂社史・資生堂と銀座のあゆみ八十五年』(一九
五七年)、『資生堂百年史』(一九七二年)などの充実した社史や宣伝
史に加えて『福原有信伝』(一九六六年)、『福原信三』(一九七〇年)
などの伝記も刊行されている。資生堂ギャラリーの展示等を通して
企業文化部の研究・出版活動なども活発で、資生堂や化粧文化に関
する研究紀要『おいでるみんな』も一九九六年以降、年二回刊行され
主として資生堂関係者が企業史の一環として執筆している。二〇〇
六年に和田博文が『資生堂月報』など九百頁を超える資生堂の一次
資料を複製した文献集『資生堂』の監修にあたり、詳細な年表や解
題を記しているが、掲載されている参考文献は二冊を除いてすべて
資生堂やその関係者によるものである。⁴⁾資生堂ギャラリーの活動に
ついては、資生堂の企画のもとで主要紙の悉皆調査による『資生堂

ギャラリー七十五年史一九一九〜一九九四」が制作され、一次資料の宝庫となっているが個別テーマにおける研究が俟たれる状況だ。⁽⁵⁾ 経営学においては佐々木聡らの業績をはじめとする資生堂のチェーンストア研究が行われているが、流通組織研究に重点が特化している。⁽⁶⁾

以上により、従来の資生堂研究においては、資生堂と直接的な関係が薄いと思われる周辺領域さらには社会史全般とのダイナミックな関連が掴みにくい傾向にある。⁽⁷⁾ とりわけ資生堂では福原有信、信三ともに社外での活動が結果的に資生堂の企業イメージに大きな影響を与えており、企業史の周縁に向けた視点は一層重要になるだろう。また、チェーンストア研究を除いては同業他社やデパートなどの動向は極めて控えめな記述に留まっており、資生堂の置かれた相対的な状況の把握が難しい。福原信三と銀座の関係についても、『銀座』刊行以後の動きについては殆ど触れられておらず、本稿で引用した信三の寄稿についてもその多くがこれまで引用されていないものである。

銀座に関しても、エッセイは多数発表されているが研究はきわめて少ない。そもそも、企業研究は資料収集面に困難がつきまとうがそれは小売商店街である銀座研究にも共通するものだろう。藤森照信、陣内秀信、初田享らによる一連の先駆的な研究や、近年の岡本哲志『銀座四百年…都市空間の歴史』（二〇〇六年）など、建築史家

による研究が中心となっている。⁽⁸⁾ 東京の都市計画については越澤明『東京の都市計画』（一九九一年）などで詳述されている。しかしこれも銀座と福原信三との関係については詳述されていない。

本稿では最初に創業者、福原有信と「東京新橋資生堂」の時代について概観したあと、福原信三による『銀座』を中心とした著作を辿りながら、「東京銀座資生堂」への転換の背景を、主に一九二〇年代の銀座をもとに検討していく。

一 福原有信と新橋資生堂

資生堂は一八七二年、創業者たる福原有信、矢野義鉄、前田清則により日本初の民間の西洋調剤薬局として創業した。社名は易経の一節「至哉坤元 万物資生（至れる哉坤元、万物資りて生ず）」に由来し、東洋と西洋の融合を理想としたという。陸軍軍医の松本良順らの協力を得て、新橋には診療所である開陽院を開き、ついで神田等に日本における薬品製造の嚆矢となる製薬工場も開いた。創業当時は複数の経営者の存在を反映し、福原有信が店舗を有し、現在の資生堂の源流となる新橋資生堂のほかにも、日本橋や室町、牛込などに同じく資生堂が存在した。松本良順「大先生」の資生堂への訪問診察日は新聞でも報じられたほどである。⁽⁹⁾ 本稿ではこの新橋資生堂を扱うが、一九三〇年に刊行された小野田素夢『銀座通』には新橋資生堂が「漢方医の領分を侵略」したと記されている。⁽¹⁰⁾

新橋資生堂は創業後まもなく、業績不振に陥るが現在の東京慈恵会医科大学・同附属病院の創設者である高木兼寛が、東京病院の薬局を資生堂に委ねた。贅沢な設備を誇る東京病院との関係は新橋資生堂に高級なイメージを構築するのにも幸いし、資生堂は再び興隆の機会を得た。有信自身も研究熱心で一八八〇年代には『東京薬舗雑誌』、『薬剤誌』など専門誌へ論文や翻訳を次々に寄稿している。

「資生堂福原有信」として「薬物試験及製造簡易法」と題した連載や、「酢酸エーテル製造法の説」「石鹼分析ノ説」など英語論文の翻訳が掲載された。

一八八八年には薬用歯磨やフロリン（整髮料）、ペプシネ飴（胃薬）といった商品の販売も開始された。歯磨ははじめての国産の練歯磨として「ハイカラ」だと話題になった。海軍の御用達ともなり、普及品が二、三銭であった当時に二十五銭と高価ながら、「品質本位」を強調して定評を得た。

一八九〇年代になると東京名所案内といった冊子が次々に刊行されるが、資生堂は「薬舗」として紹介されるようになる。『東洋大都會』（一八八八年）では「今市中の薬舗中、其著名なるもの」の筆頭として新橋資生堂が挙げられ、『東京名物志』（一九〇一年）には、「福原資生堂 ペプシ子飴を以て聞え其他製剤多く又石鹼香水歯磨等を製造販売す」と紹介されている。

一方で福原有信は、日本における西洋風の医薬分業の定着という

目標のもとで多岐にわたる実業界での活動を開始し、後半生においては資生堂以外での活躍が中心となっていた。一八七八年には薬学博士、長井長義のドイツからの帰国を促し、株式会社大日本製薬会社設立に加わった。経営においては当時より「薬業界の共存共栄」を重視し、一八七五年頃薬舗会を、一八八二年頃製薬会を、一八八九年には薬剤師会を設立した。後には全国薬剤師連合会長さらには日本薬剤師会長に就任するなど、国内製薬業の草創期の重鎮の一人となっている。

一八八〇年頃には生命保険事業に着手し、日本で二番目となる生命保険会社、帝国生命保険株式会社を設立した。⁽¹³⁾ 東京商工会議所名誉議員や赤十字社評議員、京橋区会議長などの公職や、日本電力株式会社取締役、宇治川電気株式会社取締役などの要職を歴任し、明治後期には名士としての声望を確実なものとしていた。一八九六年には皇太后陛下が逗子来訪の際に「逗子海浜眺望の最高位置」にある有信の別荘に立ち寄り、福原邸前の浜辺を散策された後、「御機嫌麗はしく御帰邸遊ばされた」と報じられている。⁽¹⁴⁾ 有信の娘、美枝も「京橋区出雲町『帝国生命保険株式会社社長福原有信氏の四女』（波傍線筆者）として『読売新聞』に写真入りで紹介されるなど、裕福な実業家として人々に知られるようになっていった。

一八九七年には最初の化粧水、「オイデルミン」を発売した。西洋調剤薬局の伝統を反映した「医学的見地による処方」が強調され、

製品名もギリシャ語の「オイ（良い）」「デルマ（皮膚）」に由来している。現在もリニューアルを続けて販売されているロングセラー商品だ。明治三十年代は日本における化粧品産業の成立期と見做され、化粧品生産高も急増しているが、資生堂の化粧品への進出もこうした時代の潮流を反映したもののだろう。

一九〇〇年に有信は欧米視察旅行に出かけるが、ニューヨークのドラッグストアで化粧品やソーダが販売されている様子に大いに衝撃を受ける。帰国後、薬局内にソーダ水製造機や什器もすべて当地から輸入するなど細部までこだわったソーダファウンテンを開設した。ソーダ水は高価だったが、化粧品のお土産をつけたことから、近隣に住んでいた新橋芸妓が集まるようになり、銀座に「一種の気分」⁽¹⁵⁾を添えるようになった。

二 新橋と銀座

銀座は江戸に栄えずして、東京に繁昌する處。⁽¹⁶⁾

大正末期、このように喩えられているように、銀座は一八七二年の大火で一带が焼失した後、政府が主導して造営した日本初の西洋風街区である。当時の井上馨蔵相の提唱に大隈重信、伊藤博文らが賛同し、由利公正東京府知事との協議を経て、英国人技師ウォート

ルスが設計を担当した。路面が耐火性煉瓦で舗装され、リージェントストリートを模したアーケードのついたジョージアン様式の街並は完成すると「煉瓦地」と称され、「お新しい気分を発散する区域」として人々の耳目を集めた。⁽¹⁷⁾当時、銀座は四方を掘割に囲まれており、銀座に入るには新橋、京橋、数寄屋橋、三原橋のいずれかの橋を渡らねばならず、それゆえに一層独立した雰囲気を保つことが出来た。ここに柳やガス灯などが加わって独特の風情を醸し出したのである。⁽¹⁸⁾

この「煉瓦地」は現在の銀座一丁目から八丁目までを含んでいたが、正式な町名としての銀座は現在の銀座一丁目から四丁目に限られていた。現在の五丁目から八丁目にかけては出雲町、竹川町、南金六町など個別の町名があり、通称として銀座とも、新橋寄りの地域では新橋とも称されていた。資生堂が創業した出雲町、その後店舗を拡大した竹川町もこうした「煉瓦地」の一角である。

これらの地域は新橋芸妓が集う花街としても知られていた。

一九〇一年に発行された『新撰東京名所図会』においても「南京六町、出雲町、日吉町、丸屋町、八官町、加賀町、総十郎町、竹川町、南鍋町邊に住む歌妓を総称して新橋藝妓といふ」と記されている。⁽¹⁹⁾新橋は江戸時代を代表する花街であった柳橋にかわり、明治の元勲達の重用を得て繁栄を謳歌していた。資生堂の裏手にはこうした花街が広がっており、福原信三も「私は花柳界の真只中で成長し

た」と語っている。⁽²⁰⁾

一方で新橋は西洋文化の発信地である横浜と直結する鉄道の終点であった。「当時の新橋は東京の玄関口で、彼処から銀座へ人が流れて来る」ため、当時を知る者は銀座も新橋寄りのほうが景気がよかったと口を揃える。

銀座二丁目会の長老達は一九四二年に次のように語っている。

歐羅巴の都市のやうなと云はれた煉瓦地、銀座と云ふよりも煉瓦といふ方で通つてをりました。その煉瓦よりも停車場、東京横濱間しか鐵道のなかつた時の新橋は、遙に顯著なものでした。新橋に停車場があるので、銀座八丁が煉瓦地になる段取りにもなつたのです。(中略)横濱開港以来は公私とも外人の出入がありました。東京になつては激増してまゐりました。早く京濱鐵道が出来たのも其關係からであり、その着發する停車場が新橋であつた處から、日本の大玄關だといふ心持も出て來たのです。若し新橋停車場がなくば、若しくは他の地點であつたらば、煉瓦地の出現も何とあらうか。まして素早く下町離れした、新しい氣持になれたか否か。⁽²¹⁾

新橋に加えて銀座の東には明石町に代表される外国人居留地、築地も控えていた。⁽²²⁾ こうして銀座は「所謂文明に親昵する便宜を生

じ」、「異国風の新繁華街」⁽²³⁾として、地の利とあわせて東京の新名所となつていった。

もつとも、商店街としての銀座は煉瓦地造営のために旧來の住民が立ち退く一方で、不慣れな洋風の建物や湿度の高さなどの問題から新規の居住者が集まらなかつた。空き家では自殺者も見られたことから新橋芸妓たちの間で銀座には幽霊が出るとまで噂されたほどで、当初は大蛇などを陳列した見世物小屋も立ち並んでいた。

一八八〇年代に入ると、情報の集積地という地の利を生かして新聞各社が次々とその本支社を構え始めた。官公庁にも近く、政治結社等も活動を始める。福沢諭吉による最初の実業家社交組織である交詢社も現在の銀座六丁目に設立されている。商店も増加し福原有信も一八八〇年代に「銀座は段々と繁華なところになつてきた」と回想している。⁽²⁴⁾

一八九〇年に刊行された『商人名家東京買物独案内』には資生堂が薬舗として登場するほか、時計貴金属天賞堂、服部時計店のほか洋紙屋や西洋家具店、「明治二十三年の国会開會當時から、銀座のレストランとして、ハイカラの中心だつた」清新軒や三橋亭などの銀座を代表する専門店が登場する。「都下第一の宏壮都下第一の美麗なり」と評され、日清戦争後には日本橋を凌ぐようになった。⁽²⁵⁾

このように明治期の銀座は「男性の街」として発展し、商店も彼らの需要に應えていた。今和次郎の一九二五年の銀座街頭調査でも

女性の洋装は全体の1%だが、男性は三割強が洋装を採用している。洋装をもっとも早くに必要なとした皇族や政府関係者、官僚のニーズを銀座の商店が満たしていった。「私の家は靴商ですが、二十三年の国会開設の時には、抱へ靴が非常に売れました。品物が間に合はない位で、殊に売れたのは四ツ折というやつです。多分新たに議員になった人達が買ったのでせう」。谷澤靴店の店主は当時をこのように回想している。⁽²⁶⁾ 資生堂の存在が銀座に「一種の気分」を添えたとされるのも、こうした背景ゆえのことであった。

資生堂の新聞・雑誌広告では明治期から大正初期にかけては「本舗 東京市新橋出雲町角 資生堂 福原有信」「東京市京橋区出雲町一番地 福原資生堂」などが使われており、一九一七年十一月以降は「東京新橋 福原資生堂」で統一されている。「東京銀座 福原資生堂」の表記は一九一三年に一度使用されたのみである。⁽²⁷⁾ 有信の時代の資生堂には最先端の西洋文化の玄関口に加えて新橋芸者の艶やかなイメージの両方を想起することが出来る。「新橋」は、「銀座」よりもむしろ相応しかったものと思われる。

三 福原有信と東京銀座資生堂

有信の時代に一定の伝統と信頼を築き上げた「東京新橋資生堂」であるが、福原信三が経営に本格的に参加すると、一九二二年を契機に「東京銀座資生堂」へと転換する。

福原有信三は一八八三年に福原有信の三男として生まれ、千葉医学専門学校（現・千葉大）薬学科を卒業後、一九〇八年に渡米し、コロンビア大学薬学部で学んだ。⁽²⁸⁾ 現地の薬品製造会社に勤務した後、パリを中心に約一年間のヨーロッパ遊学を経て、一九一三年に帰国した。⁽²⁹⁾

信三が帰国する前年には明治から大正へと時代が移り、銀座も大きな過渡期に直面していた。翌年には第一次世界大戦が勃発し、パリからの化粧品輸入の断絶と好景気を背景に、日本製高級化粧品に対する需要が急速に高まり、国産の化粧品の売り上げは飛躍的に伸びた。⁽³⁰⁾ 信三は一九一六年に化粧品部門を独立させ、資生堂化粧品部を開店し、化粧品の製造販売に本格的に乗り出すとともに現在の宣伝制作部の原点となる意匠部を設立した。現在も資生堂宣伝制作部は、広告やパッケージのデザインから、売り場などのスペースデザインに至るまで代理店に委託することなく、自社内で制作しうる世界でも珍しい総合的なインハウスデザイン組織として知られている。花椿マークや独自の書体は信三によって相次いで制定され、有信の時代の鷹のマークの調剤薬局から大幅にイメージの転換が図られた。そして一九二二年以降、『銀座』の刊行と軌を一にして「東京新橋資生堂」を「東京銀座資生堂」へと変更し、瞬く間に銀座の資生堂という強力なブランドイメージを構築していく。一九二五年には「銀座を代表する店はどこか」との雑誌の誌上座談会においても資

生堂かカフェーライオンかと議論されている。⁽³¹⁾

1 『銀座』刊行の経緯

「銀座を愛する各界の知名文化人が文章を寄せた『銀座』は、四六判、口絵写真二九頁、木版一葉、本文三五八頁という内容で、明治・大正期の銀座を記録し、今ではそのころの最大の資料とまでなっている。それは改修工事で荒される銀座をみての福原信三のひそかな抗議であったかもしれない⁽³²⁾」

のちに資生堂社史でこのように紹介される『銀座』は信三自身も「史外の東京史」の試みと語っているように、銀座に縁のある文化人ら五十名以上が寄稿した。当時としては斬新な形式の書籍である。出版の直接的な契機は当時の東京市長、後藤新平による銀座通りの舗道拡張計画だ。この計画には銀座の象徴として愛されてきた柳並木の撤去と公孫樹への植え替え、舗道の煉瓦の木煉瓦への変更、やはり名物的な存在となっていた夜店の撤去なども含まれていた。これに対して一九一九年に銀座の商店が団結し、日本初の商店街連合会「銀座通連合会」の前身となる「京新連合会」を組織して後藤に陳情書を提出した。銀座の夜店も「京新親睦会」と称した連合組織を作って京新連合会を支援した。

連合会はとりわけ柳の伐採について反対し、「銀座の美観の半ばを占めたる柳樹を抜き去りて代ふるに無趣味の公孫樹を以てせんと

する此の残虐の光景に接して洵に我が手足を断たれ利刃を我が胸に擬せらるるの感あり」と計画変更を強く訴えている。⁽³³⁾新聞各社も銀座に本拠を構えた会社が多いこともあり、連合会に同情的である（もっとも『読売新聞』では「哀れッほい陳情書」だとしてやや冷めている⁽³⁴⁾）。しかし東京市はこうした陳情に対して、時代に応じて先端のものを受け入れてきたのが銀座である、として却下し、一九二一年八月に工事が敢行されることとなった。もっとも後藤も理由なく公孫樹の移植を主張したのではない。公孫樹は現在も東京都の木に指定され、東京大学の学章にもデザインされているように、その原種はアジアにあり、日本あるいはアジアを象徴するに適した樹木として考えられていた。後藤新平自身、一九一六年にすでに『三千年來盆栽に植え来りたる公孫樹を大陸に移し植えて世界的に繁茂させねばならぬ』との長い標題のもとで対外政策論を展開しており、東京を代表する街路である銀座通りに公孫樹の植樹を希望するのは当然であった。⁽³⁵⁾

工事着手直前となる同年七月に福原信三は同書の刊行を決意し、冒頭に次のように記している。

取られる柳の木に執着があつたといふほどでもないのですが、
續いて車道は碎はされる、人道は狭まる、もうこの煉瓦道もア
スファルトになつて了ふのかと思つた時、ふと昔の銀座が戀し

くなつて、せめて後の語り草に、その昔から昨日まであつた銀座を残して置きたいやうな気がしたのです。⁽³⁶⁾

『銀座』は非売品であるにもかかわらず、「出雲町の資生堂では銀座繁昌の今昔を調べ『銀座』といふ冊子を編輯し近く御帰朝の東宮殿下に献納するさうで目下編輯を急いで居る」と新聞でもその刊行が報じられるなど注目を集めた。⁽³⁷⁾ 関東大震災後には、震災前の資料が消失するなかで銀座に関する文献の古典として珍重されるようにもなり、福田勝治による同名の『銀座』（一九三六年）では信三の許可を得てその一部が転載されている。銀座二丁目会による『伸び行く銀座』（一九四二年）でも銀座の長老達が、近代銀座の初期の記録として『銀座』に言及しており、本書の出版自体が資生堂と銀座との連想を強力に高めていることが窺われる。

2 銀座の三大課題

同書では信三自身が「『銀座』の編輯について」を著し、刊行の最大の目的は銀座をよりよくするために皆で考えることにあると強調する。右記の『銀座』刊行を報じる新聞でも「之を機に色々行はれる銀座改造の意見」として、同書が銀座の将来に関する議論を喚起したことを伝えている。信三はきわめて具体的に震災直前の銀座が抱える課題を明示しているが、ここに資生堂が新橋から銀座へと

表記を変更した理由の一端も窺うことが出来る。信三は銀座の課題として以下の三点を挙げている。

① 「銀座らしさ」の消滅

第一の課題は煉瓦街の変遷による「銀座らしさ」の消滅だ。

最初に同一形式で建築されました煉瓦作りの二階家の屋根が棟つゞきになつて、或程度の統一観があり、何處かしら他所との區別計りでなしに、一定した氣持ちがありました。若しあれが一軒々々異なつて、洋風唐造り、土藏作り、純日本風の店屋などが入交つて立ち並んで居りましたら、あんなスッキリした氣持は出なかつたに違ひありません。その證據には銀座以外の何所の小賣店街にも、銀座の氣持ちがなかつたのです。⁽³⁸⁾

リージェントストリートを模してつくられた建造当初の整然としたアーケードは、街の繁栄とともに各々が好みの建物を増改築するなどして様変わりしつつあつた。いまや銀座の象徴でもある和光の時計塔は一八九五年に服部時計店の初代時計塔として建造されているが、煉瓦街の当初の整然とした街並みからすれば大幅な変則となる建物である。変化に対して信三は「現在の銀座は外の小売店街との區別がない」と批判し、銀座独特の魅力が失われていくことを嘆

いている。³⁹⁾

②新橋の凋落

第二に、新橋駅の閉鎖に伴う新橋全体の衰退である。一九一四年に東京駅が開業すると、新橋駅は閉鎖され、⁴⁰⁾新橋そして銀座は西洋文明の窓口そして情報の集積地としての特権的な地位を失うこととなった。かわってそれまで「三菱が原」と称され、ほとんど開発が進められていなかった丸の内に注目が集まっていく。丸の内の街並みは「一丁倫敦」と称され、なかでも建造中の丸ビルは注目的であった。高浜虚子はその建造中からホトトギス発行所として部屋を予約したと高揚感をもって記している。⁴¹⁾

信三は、虚子とは対照的に、新橋を眺めながら嘆息をついている。

目を放てば遠く一帯の緑を背中にして、此の世の務めを済ませた顔の舊新橋のステーションを見ても、私には懐旧の念日に新なるものがあります。

東海道線の終点である新橋は「ステーション」と称されて明治の開通以来、東京の名所であった。⁴²⁾幼少期を新橋で過ごした奥野信太郎は次のように回想している。

新橋ステーションがなくなつて汐留駅となつたとき、これはもう大分ぼくが大きくなつてからではあるが、実に寂しい思がした。それは吉川の洋食につながる、そしてやはり銀座とかかわりのある一本の支柱が、ぼきりと折れた感じがしたからだ。今の銀座はもはやぼくたちが子供心に感じたほど生々しい新鮮な西洋のにおいを、人々の心のなかに微風の快さのように軽く波だたせてはくれないであろう。少くとも西洋のにおいは銀座以外にも東京の方々にころがっているようになったからである。⁴³⁾

東京駅の開通は、そもそも商業の中心が新橋のお膝元として発展した銀座から離れていくのではないかという深刻な不安をももたらしていた。信三はこのように続ける。

地理上銀座といふものが、所謂東京の商業中心の区域からは稍放れ過ぎてゐる。そうして愈東京ステーションの表道路路が出来上つて其働きを縦横にする時代には、所謂東京の商業區域は少くも今より更に東漸するものであるといふことは誰しも想像し得る所であらうと思ひます。勿論東京灣築港に伴ひ芝浦一帯の開発如何によつては、其東漸の勢は多少とも緩和せられることではありまじやうが、兎に角、銀座といふものは、東京市の商業中樞区域からいへば少し線を脱しかけてゐることだけは否む

ことの出来ない事実であらうと思はれます。

「此の世の務めを済ませた」のは駄だけではなかった。

一九一〇年に松山省三がカフェ・プランタンを開業すると、ライオンやタイガーなどのカフェーの開店が続き銀座に「新橋花柳界の心胆をも寒からしめるカフェー時代」⁽⁴⁴⁾が始まった。当初、作家や芸術家など知識人の社交場であったカフェーは一九二〇年代を通してその性格をすっかり変化させていく。一九一〇年代初期には「真面目な色恋の沙汰」が見られたもの一〇年代末期には「近頃のカフェー女は私娼化したなどと極論する人もある」とまで評されるようになった。⁽⁴⁵⁾カフェーの興隆は同時に有信の時代から新橋資生堂に風情を添えていた新橋芸妓の凋落を意味していた。一九二〇年代を経るなかでこの傾向は一層顕著になっていく。

今日の時世に於て、若い男と若い女とが最も容易に、最も安価に、一挙手一投足の労で、相接近し、相交錯し得る舞台はカフェーより他には無い。⁽⁴⁶⁾

カフェーの女給は芸妓に比べてずっと手軽な遊興の相手である。ジャーナリストの村島帰之は『カフェー 歓楽の王宮』(一九二九年)においてカフェーの興隆と芸妓の激減を指摘し、カフェー誕生

から十年で女給の数は千年の歴史を持つ芸妓の数と同等に上ると示している。村島はカフェーを「近代感覚の私生児」と称してその魅力を次のように評している。

第一、テンポが早い。手軽である。安値である。それに、待合入りの如くこそこそ遊び、若くは所謂『かくれ遊び』ではなく、堂々大手をふつてくり込むのだ。

現代はスピードの時代である。手続の面倒な(待合は誰でも客とするとは限つてゐない)時間の取る(芸者の来るまでにはどうしても三十分は待たねばならぬ)そして値ひの高い(待合では五円以内の遊びなどは絶対に出来ない)さうしたところに、⁽⁴⁷⁾どうしてスピードのある近代人が寄りつかう。

村島によれば近代人は独身者であれ妻帯者であれ「恋愛気分」を渴望しているのであり、「娼妓の如く、義務づけられて性的要求に応ずるのでは恋愛気分にはそはない」という。

新橋芸妓を鼻屑にした明治の元勳にも高齢者、物故者が増えていった。こうした新橋の凋落傾向は『銀座』刊行後にいつそう顕著になり、一九二〇年代に記された文芸作品にも頻繁に描かれるようになる。

私は今でも時々勸工場の夢をみるがこの景をみることが多い。この階上の裏側の窓から新橋の美妓諸姉の夕化粧の艶姿がみえるとして、若いものたちが事に託してかいまみたものだと今日
日の古老のうちあけ話である。(中略)

足が一步銀座に入ると実にモダンである。何かいい材料にと思つてポカンとしている前をつばめの如く、断髪的美女がかすめて通る
(岸田劉生『新古細句銀座通』一九二七年)⁽⁴⁸⁾

同じく裏通りであるが、新橋から尾張町に至るまでの両側は、つまり出雲町、南金六町、竹川町、惣十郎町、鍋町、三十間堀のあたりは、いはゆる花街としての『新橋』、多くの芸者屋待合が軒を並べ、花月、錦水その他名だたる、しかしモポには余り用のなささうな、しかつめらしい料亭が古めかしいよそほひを凝らしてゐる。

(今和次郎編纂『新版大東京案内(上)』一九二九年)⁽⁴⁹⁾

新橋も昔日の面影なく、ただ荒涼たるものありだネ。

(野村益三『東京見物』帝都教育会、一九二九年)⁽⁵⁰⁾

新橋芸妓も銀座を形づくる一分子ではあるが、真に銀座を愛する人々にとっては余り縁のない代物。(中略) われ／＼近代人

は、芸妓のことぐらゐる資本家と老人にまかしておいても恥にはならぬと思ふ。
(小野田素夢『銀座通』一九三〇年)⁽⁵¹⁾

徳田秋声『縮図』は「晩飯時間の資生堂は、いつにも変わらずしも下も一杯であった」と、資生堂パーラーでの男女の会話からはじまり、第一次大戦後の銀座が回想されている。

この裏通りに巢喰つている花柳界も、時に時代の波を被つて、或る時は彼等の洗練された風俗や日本髪が、世界戦以後のモダンイズムの横溢につれて圧倒的に流行しはじめた洋装やパーマネットに押されて、昼間の銀座では、時代錯誤の可笑しさ身すぼらしさをさへ感じさせたこともあつた。

(徳田秋声『縮図』一九四七年)⁽⁵²⁾

新橋芸妓屋組合でもこの深刻な危機に対して、芸妓に教養をつけねばならないと「新橋芸妓学校」を開くなど、対策を講じている。学校は資生堂のすぐ裏手に開かれた。組合頭取の川村徳太郎は次のように語っている。

藝妓がいたづらに舊習になづんでゐれば、當國を風靡てゐるモダンイズムの波を乗切ることが出来ないだらう。此の風潮に順

應^{おう}出^で來^きるやうな教育^{けいよく}を彼^{かれ}等^らにほどこす必要^{ひつよう}がある。藝^{げい}妓^いの商^{しょう}賣^{ばい}といふものが現代^{げんだい}ほど衰^{すい}微^ひしたことはないのである。青年^{せいねん}達^{たち}がカフェーやバーに集^{あつ}まるのは女^{おんな}給^{たま}といふものが一般^{はん}により多くの教^{けい}養^{よう}を持^もつて居^をり、青年^{せいねん}達^{たち}の興^{きよう}味^みに充^{じゆう}分^{ぶん}應^{おう}じ得^とるからである。女^{おんな}給^{たま}等は新聞^{しんぶん}を讀^よみ得^よ、雑誌^{ざっし}を讀^よみ、時代^{じだい}のトピックを語^{かた}り得^うるのである。即^{すなは}ち女^{おんな}給^{たま}等は藝^{げい}妓^いに比^ひ較^{かく}してはずつと摩登^{まげん}であり智^ち的^{てき}なのである、もし十圓^{じゅうえん}のチイッブをやれば女^{おんな}給^{たま}のサーヴイスといふものは大^{たい}變^{へん}である。彼^{かの}女^{おんな}等^らがその摩登^{まげん}な心^{こころ}意^い氣^きにより、藝^{げい}妓^いから客^{きやく}を奪^{さく}ふのは當然^{たうぜん}である。

(川村徳太郎述『新橋を語る』一九三二年)⁽⁵³⁾

元号が改まると、新しい過去もひどく旧時代的な雰囲気^{おんけい}を帯^{おび}びるようになる。大正期^{たいしゅうき}の女性誌^{じょせいし}でも、旧式^{きゅうしき}だと思^{おも}われるものに対しては「何^{なに}うも明治^{めいし}臭^{くさ}がぬけていない」などと容^{ゆる}赦^{じや}がない。新橋^{しんばし}はまさに「明治^{めいし}臭^{くさ}」を纏^{まと}った地名^{ちめい}と化^{くわ}していった。明治^{めいし}のはじめ、新橋^{しんばし}は天皇^{てんかう}が臨^{りん}席^{せき}されての鉄道^{てつどう}の開通^{かいとう}とともに華^わ々^わしく幕^{まく}を開^{ひら}けたが、大正^{たいしゅう}時代^{じだい}はその凋落^{てうらく}傾向^{けんかう}を象^{さう}徴^{てい}するように新橋^{しんばし}駅^{えき}での明治^{めいし}天皇^{てんかう}の葬送^{そうそう}にはじまった。『読売新聞^{よみうりしんぶん}』の記事^{きじ}掲載^{けいさい}数^{すう}においては明治^{めいし}期^きに新橋^{しんばし}、銀座^{ぎんざ}、丸^{まる}の内の項目^{くむぐ}数はそれぞれ二七三二、八八四、五五であるが、大正^{たいしゅう}期^きにおいては九一六、一〇九一、二三六となり、新橋^{しんばし}の激減^{げきげん}、微増^{ゐぞう}の銀座^{ぎんざ}、そして丸^{まる}の内の台頭^{たいとう}が目立^{めだ}ち立^たっている。今和次郎^{いまわじらう}による

一九二五年の銀座街頭調査^{ぎんざがうとうさ}においても、「銀座^{ぎんざ}で一番^{いちばん}寂^{さび}しいのは東側^{とうがわ}の新橋^{しんばし}寄り」だと数値^{すうち}とともに記^きされている。⁽⁵⁴⁾

新橋^{しんばし}のイメージの低下^{ていげ}は、化粧品^{けしょうひん}販^{はん}売^うに本格的^{ほんかくてき}に進出^{しんしゅつ}したばかりの資生堂^{せいせいどう}にとつては一層^{いっそう}問題^{もんだい}が深刻^{しんかく}であったと考^{かんが}えられよう。現在^{げんざい}でも新橋^{しんばし}といえは中年^{ちゅうねん}男性^{なんせい}という印象^{いんげう}が強く、香水^{かうすい}や高級^{こうきゆう}化粧品^{けしょうひん}のイメージとは程^{ほど}遠^{とほ}く海外^{かいがい}における知名度^{ちかぞへ}も殆^{たいてい}どない。信三^{しんぞう}はさらなるイメージダウンを恐^{おそ}れてか『銀座^{ぎんざ}』においては新橋^{しんばし}の凋落^{てうらく}について詳^{しょう}述^{じゆつ}はしていないが、ここに新橋^{しんばし}から銀座^{ぎんざ}へと店名^{てんめい}表^{ひょう}記^きを更^か更^かした背景^{はいけい}の一端^{いちたん}があることは明らか^{めいらか}だろう。ほぼ十年^{じゅうねん}を経^へた後に「交通^{かうつう}機^き関^{かん}の中心^{しんしん}——新橋^{しんばし}が東京^{とうきやう}駅^{えき}に移^{うつ}りましたので、銀座^{ぎんざ}の中心^{しんしん}も移^{うつ}りました」などと、新橋^{しんばし}駅^{えき}の閉鎖^{へいさ}によるショッックについて明^{めい}言^{げん}し、花柳^{はなやなぎ}界^{かい}の変遷^{へんせん}についても次のように語^{かた}っている。

近代^{きんたい}風景^{ふうけい}はウエートレスが藝^{げい}妓^いに代^かつて銀座^{ぎんざ}の平面^{へいめん}を占^{せん}領^{りやう}しました結果^{けっか}即^{すなは}ち花柳^{はなやなぎ}界^{かい}の推^{おし}移^{うつ}から大通^{だうつう}りの特^{とく}徴^{てい}ある商店^{しょうてん}同^{どう}様^{やう}の小^{せう}賣^{ばい}商^{しょう}が最近^{さいきん}横^{よこ}丁^{てい}にも進^{しん}出^{しゅつ}して來^きましたので、いはゞ今^{いま}迄^{これ}の商店^{しょうてん}と花柳^{はなやなぎ}界^{かい}との交^{かう}錯^{さく}が、商店^{しょうてん}とカフェーとの交^{かう}錯^{さく}となつた譯^{わけ}です。そしてカフェーの性質^{せいしやう}は全く^{かくく}柳暗^{りゅうあん}の闇^{やみ}を拂^{はら}つて銀座^{ぎんざ}を花明^{はなめい}の巷^{ちやう}に改造^{くわいぞう}して了^{しま}つた様^{やう}であります。⁽⁵⁵⁾

③日本橋との競争激化

信三は銀座の第三の課題として日本橋のデパートとの競争の激化を挙げている。日本橋と銀座は距離的にも近いうえ、それぞれ江戸の中心そして東京の中心としての意識から対抗関係にあった。銀座は一八九〇年代に入ると日本橋を超えるほどの隆盛を誇るようになったが、一九〇四年には三井呉服店が「デパートメントストア宣言」とともに三越呉服店として開店する。定額販売や陳列販売をはじめ現代的な小売販売方式が採用されるなか、高島屋や白木屋など日本橋を中心とした老舗呉服店も次々と百貨店の業態へと衣替えしていった。「流行」を意識した品揃えや「今日は帝劇、明日は三越」といったキャッチコピーが話題になるなど、近代的な広告も展開されるなかで百貨店と小売店の競争は極めて激しいものになっていった。しかも新たに交通の中心として期待される東京駅は日本橋の至近距離に位置しているのである。

信三はいまや銀座の両側にある「二百四十余の総商店」の一日の売上が東京有数のデパートメントストアの売上高に較べるとずっと少ないのではないかと懸念し、銀座全体での対策の必要性を強調している。

四 銀座発の銀座改造計画

このように震災前の銀座は景観問題、新橋の衰退に加えて丸の内

の台頭や日本橋のデパートとの競合といった憂慮すべき事態に直面していた。こうした状況下での東京市による都市改造計画は、「歴史上の名所を破壊して市区改正の犠牲たらしめん」とする、強力かつ、わかりやすい外圧となり銀座商店の連帯を急速に進めた。⁵⁶ 信三は「銀座」の刊行を通して議論を喚起し、銀座の連携に先導的な役割を果たしながら、銀座の資生堂としての存在感を高めた。同時に「東京銀座資生堂」へと表記を変更したのである。さらに信三は銀座を「よりよく」する方向性を具体的に定めたとして、商店、連合会、行政が各々とるべききわめて具体的な対策を提案した。資生堂には「最初の建築評論家」として一九一〇年代から先駆的な建築評論を続けてきた黒田鵬心が一時は社員としても参加しており、信三のブレンとして活躍していた。そして信三の提案は関東大震災により、都市計画への関心が急速に高まるなかで、急速に現実性を高めていった。

1 「大銀座」計画と行政との連携

信三による最大の提案は、正式な町名としての銀座を従来の一丁目から四丁目に加えて八丁目まで拡大するという「大銀座」計画である。

銀座の衰亡はやがて自分の衰亡であるばかりでなく、又東京

市の一つの大きな損害であるといふことを考へますと、小さい自分の利益や主張は抛つても銀座住民たる凡ての方と協同一致して、此銀座の両側を一つの銀座といふ小売商店の一大集團としてたたしめたいと、寝ても醒めても考へるのであります。

此意味に於て、私は、京橋から新橋に於ける東西両側の一帯を銀座と見做して、これが丁度一個の小賣商店の集合、デパートメントストアのやうな纏つた感じの下に、假令へば竹川町出雲町のやうな町名は廢して各人が團結したら面白い商賣が出来やうと思ふのであります。

竹川町や出雲町は、創業以来の資生堂の所在地だが、信三は馴染みの町名を廢してまでも正式に「銀座」とするよう求めた。信三には正式に町名を「銀座」に包含することで、台頭する丸の内や日本橋の百貨店に対抗して広域の銀座の連帯を実現するとともに凋落傾向の止まらぬ「新橋」の古いイメージを払拭しようと考えていたものと思われる。当時、話題になっていた「銀ぶら」も、銀座一丁目から四丁目以外では「出雲町ぶら」や「尾張町ぶら」が本当だとして、揶揄する者もあった。一方で信三が震災後に書いた「銀座の新装」では、銀座という名前の伝統は慶長年間から続いており、日本橋との対抗にも有効であるという。

斯くして新生したる銀座の商舗は何れにしる須らく「銀座」なる慶長十七年以來の老舗名前を標榜して世に立つべきである。三越といひ白木屋といひ大丸といひ、その老舗名前に對する世の印象と親しみと信用は誠に偉大なるものである。そして「銀座」なる老舗名前に對してこれを辱かしめぬだけの理解と努力とを以て益々此地の發展を心掛けたきものである。⁵⁷

信三は銀座の中心となる銀座通りについても具体的に将来像を示している。当時は銀座通りには都電が通つていたが、信三はブロードウェイか、ファイフス・アヴェニューかと二案を提示しながら「東京市の商業勢力は東漸」するものと考えた場合、「銀座は電車も車も通さずに所謂ファイフス・アヴェニューのやうな形に向つて進歩せしめるのが至当である」と考えている。信三はファイフス・アヴェニューを銀座通りの理想像として考えており、この後もしばしば言及している。

信三は一方で、現実的な行政との連携を重視した。これは舗道拡張計画に際して銀座住民の声が充分に反映されなかつたことに対する反省であるとともに、東京市さらには後藤新平に對する抗議でもあるだろう。

それには先づ銀座の住民たる私共は、常に當局者と意志の融合

を計つて、當局者の計畫に十分の同情を表し、其仕事の完成については出来るだけの援助もし、又金銭上の負擔も快よくするやうになりたいと思ひます。と同時に當局者も亦假令へば交通問題についても、単に學者とか専門家とかいふものゝ論議ばかりに耳を傾けずに、其住居せる銀座民の意向とか希望とかいふものを聴いてから其計畫にかゝるといふやうな、順序にして、所謂官民一致の實を擧げたいと思ひます。

そして当局者にも積極的に銀座振興の「名案」を出してもらいたい、という。

銀座附近の住民が銀座に来るのに成たけ便利のやうに、假令へば内幸町の人が銀座に出るために山下門と土橋との間に中間の橋を設けて貫らふとか、又築地一圓を水境の公園にして貫つて日比谷公園の陸公園と對立せしむるとか、当局者は当局者としての名案を出して貰つたら宜しからうと思ふのであります。

信三は「銀座」に京新連合会による陳情書とともに東京市による回答書も掲載し、さらに後藤新平から序文を得ている。信三は、中立の姿勢を保つことによつて、かえつて自らの意図の妥当性を際立たせることを得意としている。後に信三は自らを「緩衝地帯」に喩

えている。様々な意見を消化して、中庸の立場に立つのは孔子の領分であるが、自らの役割はあくまで意見の異なる人々の間にたつことにあるのだという。⁽⁵⁸⁾例えば第二次大戦期に信三は資生堂ギャラリ―で土井晩翠らの協力を得て「失明勇士に感謝する素人美術展」を行つている。信三は当局の摘発を巧妙に免れるように中立的な仕掛けが施された展示をしばしば開いた。「緩衝地帯」として存在感を放つ信三のもとに、多様な分野から有識者が集まつている。

信三はこの後も行政に対して積極的な発言を続けた。後藤新平はニューヨーク市政調査会をモデルに日本初の都市問題に関する調査機関として東京市政調査会を設立しているが一九二二年にニューヨークからチャールズ・ビアード元コロンビア大学教授を半年間招聘した。ビアードは帝都復興に際しても市政調査会の専務理事として提言を行つたが、これに対して信三は一九二四年に「復興したい新家屋 アパートメントとアーケード」と題して『東京日日新聞』に三回の寄稿を行つている。⁽⁵⁹⁾信三は帝都復興問題に関して、「重要問題については各専門大家によつて遺憾なく論じつくされ」、「ビアード博士の二回の来日でその蘊蓄を傾けた立派な意見」を提示されたことに感謝しつつも、「自分は門外漢だが実際の境遇にある事から推して、かくありたいといふ意見」を提議したいとして、銀座の復興のあり方についての見解を示している。

実際に関東大震災を経て都市計画への関心が急速に高まるなかで、信三の改革案は明らかに銀座の復興計画に影響を与えていった。後藤新平は帝都復興計画において、信三の「フィフス・アブエニュー」構想と同じく銀座通りの都電の移転を提案した。電車が通らなくなると銀座が廃れるという銀座住民の懸念で実現しなかったが、一九六七年に都電銀座線が廃止されるまで、後々まで銀座側からも悔いる声が続いている⁽⁶⁰⁾。震災後の一九二四年には、京新連合会が信三が語るように個別の町名を廃して「大銀座」を実現するよう、東江市に請願書を提出した。翌一九二五年には、銀座各町の代表者により、再び「町名改廃と銀座拡充に関する請願」が東江市に提出され、信三も名を連ねている。請願書は「区々たる町名を統一して、帝都の代表的商業地たる銀座の面目を拡充し、世界大銀座街を出現せしむること、帝都将来の爲め最も緊要のことと存せられ候」として、「一銀座の名称下に抱擁すれば百利あつて一害なし」と強調する⁽⁶¹⁾。そして一九三〇年には出雲町、竹川町などの町名が消えて銀座五丁目から八丁目として包含され、「大銀座」が誕生した。先述の、『銀座』の刊行を報じた『読売新聞』は、信三の大銀座構想について「尚ほ進んでは銀座一丁目から新橋までを統一的の町として竹川町尾張町などの名称を廃し度いなどの改良意見もある」と進歩的意見として報じている。信三も当時は「空想に過ぎぬ」「勝手すぎる」と弁解しつつ持論を語っているが、十年を経ずして大銀座計画は実

現されることになった。

一方で写真に興味とし日本写真界の草創期の大家としても知られていた信三は、後藤新平の側近で、東京市長を務めた阪谷芳郎が会長となって設立された都市美協会との関係を深めていく。一九三三年に都市美協会が「東京市の街路を主題とした懸賞写真」を募集した際に審査員として参加し、これを機に協会の評議員⁽⁶²⁾、翌年には常務理事となり、一時は会計監査に加わった。都市美協会の会報『都市美』に写真やエッセイを寄稿したり、都市美観にまつわるコンテストの審査や研究会に積極的に参加した。

信三は一九三六年には協会が主催した、今後の開発が期待される「新宿の将来を語る座談会」にも出席し、「わたくし一人銀座から飛び込んで参りました」と遠慮しつつも、「人を寄せる方法、設備などがつくされれば繁栄するにきまっている」とその都市論を語っている。ミラノを例に出しながら、商店街の繁栄のためには何処からでも出入りがしやすいように裏通りにも配慮すべきである、などと見解を述べて会場から拍手を得ている⁽⁶³⁾。

都市美協会の重鎮である石原憲治によれば、信三は日比谷の三信ビルにあった東洋軒で開かれていた毎月の理事会にもよく出席していたという。石原は後に資生堂関係者に対して次のように語っている。

銀座といえば、あなたのところとそれから銀座町会長によくお目にかかりました、都市美という銀座が中心でしたから。広告物がきたないでしょう、東京の看板広告は⁽⁶⁴⁾。

2 銀座商店の連帯とアーケード化

信三は行政レベルでの改革を論じる一方で、銀座の美観、さらにはデパートに対する小売店の連帯という視点から銀座の商店による積極的な連帯を主張する。例えば建築については「銀座一円同じやうな形を追ひ、ウインドから照明の工合まで互に注意して、所謂『銀ぶら』のお客様に十分の快感を与へるやうに」設計すべきだという。歩道の清掃は勿論、銀座全体で協同の配達所を設け、商品券を発行したり、来客用の共同の休憩所を開設するなど「所謂銀座繁栄のために間接に効果あるもの」に対して十分に配慮したいという。「今日の如く各商店無用の競争をして反てお客に不利を与へるやうなこと」をなくし、銀座の商店は共存共栄を目指すべきだと強調する。さらに同業者が組合を作って仕入れを行えば「銀座全体の店が一つの堅い組合組織の下にかたまるやうな事にもなり、それからそれへと思はぬ面白い仕組が湧いて来て、銀座の小売商店は茲に全く其面目を新にすることにならう」と期待する。

信三によれば小売店がデパートに対して劣勢になるのは、小売商店の仕入方法による「当然の帰趣」である。小売業者には共同組織

が不可欠だとして、仕入れ等を共同で行い建物など施設も共有することで合理的な経営が出来る論じている。「大銀座」の存在は共同組織としても相応しく、「人をして『銀ぶら』せしむるだけの種々の機関を有するほど仕合せな」銀座の住人は、一日も早くその歩調をあわせるべきだと強調する。信三はアメリカ留学以来、百貨店に対抗するための小売店の連帯に並々ならぬ関心を持っていた。震災後、資生堂は全国にチェーンストアを展開し急成長を遂げるが、信三はそれに先駆ける形で銀座商店の連帯を唱えている。信三は一九二八年には「日本産業の合理化」と題して五回の新聞連載を行い、ここでは共同精神の欠如を国民的な欠点として糾弾している。

百貨店は恰も多くの細胞から成る一個の有機的細胞の如きもので、是に対して小売業は一つ宛独立せる有機的単細胞の如きものと云ふべきか。それ故に百貨店の繁栄は多細胞による有機的組織そのものの勝利を意味すると共に、小売業者の繁栄策は、即ち単細胞たる各個体を打つて共同の統一的組織化すること以外に求むべき道がないといふ結論を生ずるのである。戦争も昔は単騎の勝負が、克く全軍の集団の運命を決した時代もあるが、現在は集団の力に依つて行ひ、その精鋭なる武器は組織に於ける科学的合理的経営法に相当するのである。然るに日本人に最も欠けて居るものはこの共同動作の欠如と云ふことであつて、

それは畢竟末だ人人が、共同社会の一分子としての存在を深く意識しない思想的欠陥に帰すると思はれるのである。個人なるものは社会人として、初めて考へられることで、即ち個人の働く事も社会の爲め、社会の働くのは個人の爲めに外ならず、従つて社会の繁栄は個人に報いられ、個人が社会の繁栄を導く訳で、いひかへれば社会に対する義務を満足に遂行すれば、個人の権利となつてかへる事になるのであるが、日本人にはこの觀念が如何にも乏しい。それは個人的には他に優るとも決して劣らない我が同胞が、一度び公衆道德の問題になると、啞然たるまでに醜態を發揮することは幾多の例によつても明かである。⁶⁵

一九二五年、京新連合会は大銀座建設に関する請願と共に、京新連合会は東京市に対して「國家百年の計」として「高所より遠視」して銀座通に「美觀堅牢整然たる街区」を建設するよう陳情している。一九三五年には都市美協会が主催して「銀座街設計建築競技」がなされるなど、銀座の美觀を保つアーケード構想への関心は共有され続けていった。現在の銀座においても、銀座通連合会を筆頭にした町会が建物の高さ制限や街灯の色合いをはじめとしたルールを規定し、景觀を重視した独自の街づくりで知られている。本格的な共同組織化には至らなかつたものの、信三は現在の銀座の街づくりの原点において明確な展望を掲げ、先導的な役割を果たした。

信三の関与の詳細な調査は困難だが、信三が政府主導で造営された銀座から、「民」主導へと移行するなかで、銀座振興に最初期から尽力し、継続的にメディアを活用して銀座のスポークスマンの役割を果たしていたことは確実だ。京新連合会にも銀座七丁目会の理事としても参加し、銀座の会合に初期から熱心に参加していた様子が複数の側面に記憶されている。

町内の集まりにはよく出てこられましたね。出られないときは必ず代理がくるというふうでした。(中略) よくは知らないのだが、銀座通りとかなんとかいって、今の連合会ができる当時のいろんなものがございました。今の小松の裏に松本楼というのがあって、そこで会合したりした。銀座通りはバラックではないけない、本建築にするにはどうしたらいいかとかいろんな会合があった。それに一々出ていた。几帳面なところがありましたからね。

単に資生堂だけのことでなく、銀座全体のためという会合に出席するのはお好きだったのでしよう、きつと。⁶⁶

あの時分は夜になったら店を閉めるという銀行とか会社が少ないなかつたが、電車通りだけは九時か十時ごろまで明るくなくちゃという、銀座全体にたいする信三氏のお考えがあつて、そ

れをいろいろな人に話しておられたようですね。銀座の商店街の会合の席上とか、出入りする新聞記者や、いろいろな座談会などでも、上手な言い回しでそのことを言っておられました。

夜おそくまで店を開けていたから売り上げがあるとか儲かるとか、そんな考えは少しも持っていませんでしたね。(中略) 信三氏はああいう人ですから、銀座の商店街の親父さんの集まりなんかにはあまり出られないんじゃないかと思われがちですが、そうじゃなかったですね。いまの言葉でいうと銀座っ子ということですか、草市やなにかのときは夜おそくまでおいでになりますね。またお店も夜おそくまで開けておくので、店のまわりなど見て歩いたり、おそくなつてから帰ってくるころなど、やはり銀座っ子だなあと思いましたね。⁽⁶⁷⁾

3 各店舗の個性化

信三は銀座全体の共存共栄の前提として、小売商店による専門性の特化を強く主張している。その姿勢は一九二七年に資生堂が発行した『御婦人手帳』など、後の著作でより明確になっている。

小売商店を中心とする銀座は、小売の組織競争に陥つて居る事を自覚しなければなりません。それは商品の豊富、低廉、便利

等で優越なデパートメントストアに對するものであります。詮じつめますと百貨店は普遍化、小賣店は特殊化を理想にして居ります。即ち銀座の商品は百貨店では求められないものでなければなりません。かういふ小賣商店が一つ々々細胞となつて大きな銀座を形づくる時銀座は初めて生きて來ると思ひます。⁽⁶⁸⁾

銀座、小川町、新宿通などの小賣店集中街を考へますと、其街の建築様式、舗道、街燈、街路樹などについて實際的にはどんなのが適するかは専門家にまかせるとして、其土地だけが持つ特殊なものによつて組立てられて居るといふ事は、非常に人を惹き付ける力が多いと思ひます。人は周圍の平凡から離れて何時も變つた變化を望みます。交通其他の物質的な設備も勿論必要ですが、それ以外に小賣店特殊の設備で一つの情趣を帯びさせる事で人を惹かなければならないと思ひます。

信三は「一般的なものの一般化は到底特殊なものの一一般化の力に及ぶべくもない」として、デパートとは対照的に個々の商店の魅力のうえに成り立つ街としての銀座を強調し、「新婚の若夫婦でも恋人同士でも、気軽に散歩し、漫歩し得る様な銀座になつたら、銀座は永久に帝都の銀座として繁栄する」として期待する。

新聞連載「日本産業の合理化」では、銀座に限らず一般論として

も「各々の商品を専門的に深めた、特殊な優良品を扱ふ小売業者が集つて、特殊品の一般化として経営を共同的に行う」ことを強調する。「単に普通商品の陳列ならば外観上勸工場とかわらないし信用もその程度」であるが、「真に一流の資格あるもの」の集合であるからこそ信頼度が増すのだという。

すでに述べた通り、新橋が西洋文化の玄関口としての役割を終え、丸の内をはじめいたるところに「西洋」が感じられるようになっていた。さらに震災後の銀座には松屋をはじめ三軒のデパートが進出する。しかし信三はこれをも「銀座の立体化」としてむしろ歓迎し、あくまで銀座の繁栄の基礎は「特殊な小売商店街」にあると強調する。そして小売店の「特殊なる商品の深さは、百貨店の欠を補ふ線」であり、小売店はまず「眼前の商品をしてその深度を徹底」すべきであるとして、これこそが銀座人の次なるプライドであるとも語っている。⁽⁶⁹⁾

ほぼ三十年後にあたる一九五六年に刊行された高見順編『銀座』には、信三の期待どおりの記述を見ることが出来る。

銀座の商店もまたデパートにはおされているのはいうまでもない。しかし銀座の商店にはデパートに売っていないようなものを売っている店があることも紛れない事実だ。ここに銀座のお

しやれがある。昔は新鮮な西洋の匂いをかかせてくれるのが銀座のおしやれであった。今はデパートにないような凝つたものも売っているところに銀座のおしやれがある。おしやれの意味にも多少こうした変遷がある。⁽⁷⁰⁾

信三は資生堂においても、モダンな「資生堂調」とされるスタイルの確立に尽力した。意匠部を設立し、花椿マークや資生堂書体を制定するなど資生堂独自の意匠を確立したほか、一九一九年には資生堂ギャラリーを開設し、資生堂パーラーも含めて銀座の集客に貢献していった。資生堂ギャラリーは現存する最古の銀座のギャラリーでこれまで三千回以上の展示会が行われている。ギャラリーの展示により当時の新聞の文化面に「東京銀座資生堂」は定期的に登場するようになった。ギャラリーでは絵画のみならずパリ在住の画家らが選んだ最新の服飾品や西洋家具の展覧会なども頻繁に行われた。⁽⁷¹⁾一九二一年の子供服の輸入販売の際には初日に売り切れ、翌日の新聞には急遽、売り切れの広告を出しているほどだ。一九二三年の『資生堂月報』には、西洋式の品物が一般化するなかで、資生堂の独自性への強いこだわりをみることができる。

新意匠の子供服・婦人服・スカーフ・手提袋・洋傘・鏡台・化粧品 此頃では何処でも品物が非常に普遍的になりましただけ

特種のものでつくらうとなさる方が多くなりました。その特種
のものを必ず生むといふ確信をもつて居ります。⁽⁷²⁾

震災後に資生堂化粧品部の設計を担当した前田健二郎は、設計に
あたつて信三からとにかく「資生堂らしい建物」を、と依頼された
と回想する。⁽⁷³⁾ 資生堂パーラーもまた、料理のみならず建築やインテ
リアを含めた全体の雰囲気により資生堂さらに銀座のイメージ構築
に大きく貢献していく。

例えば、銀座七丁目の資生堂などは古い暖簾を掛けている店の
典型的なものだろうか。天井が高いのが一層気分を落ち着かせ
て、英国の一流クラブに入った時の感じを思い出させる。これ
は給仕が男なのも手伝っているのに違いない。

(吉田健一『乞食王子』⁽⁷⁴⁾)

当時あれだけ立派なところは他になかったな。資生堂でコーヒ
ーを飲む時と、ボルドーで洋酒を呑む時は、金持ちみたいな気
がした。その癖たいして懐がいたむわけではなかったから、建
物が立派だった故なのだろうな。⁽⁷⁵⁾ (岩田専太郎『銀座漫想』)

「銀座のサエグサ」の三枝進社長は、資生堂が自分の店ばかりで

なく、街全体の雰囲気までリードし、「銀座の街の文化を育ててく
れた」と語っている。⁽⁷⁶⁾ 建築やインテリア、ましてや都市が醸し出す
雰囲気は単純に機能面から考えれば、化粧品とは全く関係はない。

しかし信三はそうした特徴ある空間の効果が資生堂さらには銀座の
イメージに重なつていくことを明確に認識し銀座の小売店にも大き
く影響を与えていった。信三は「居は人の気移す」とも書いてい
る。やがて銀座の魅力は、再三にわたつて資生堂の情報誌『資生堂
月報』（一九二四年創刊）や販促物などを通して、チェインストアの
展開とともに全国に配布されていった。川路柳虹、川島理一郎ら、
当時の文化人が執筆にあたっている。一九二〇年代末に西條八十ら
の作詞による銀座をうたった流行歌がラジオで頻繁に喧伝されてい
くが、銀座に重点を置いた資生堂の広報活動はこれより大幅に遡る。
それは銀座全体の具体的な将来像を視野にいられたモダン都市の展開
に先駆けた銀座内部からの活動として注目されよう。

五 結 論

以上のように福原信三は一九二二年を契機に「東京銀座資生堂」
の商標を採用するが、それは震災前に危機的な状況にあつた新橋そ
して銀座全体を「銀座」の名のもとで活性化させようという遠大な
計画を背景としたものであつた。『銀座』刊行以後も、信三は積極
的に銀座振興に取り組むが、信三の提案の少なからぬものが実現さ

れており、信三が関東大震災後の銀座の興隆に果たした役割はより注目されるべきであろう。

関東大震災を経て同じ場所に店舗を復興すると、資生堂は次の広告を掲載し、銀座との関係を強調している。

弊社が舊位置に新築いたしましたのも、決してその位置を守るためのものではなく、銀座は将来とも矢張り帝都の中心であることを信じて、資生堂製品を内外に宣伝いたしますにも最も適當の所と信ずるからであります。

化粧品部・薬品部・写真部共に従来より一層その内容を整え最新の設備を凝しました。

高等飲料部は、出雲町時代より遙かに、その設備の典麗なること、飲料の高級なることは弊社の私かに誇といたす所であります。

花部は四時清麗なるものを取りそろえて、その設備の典麗なること、その花の優良なることを誇るに足るものであります。

二階のギャラリーは、展覧会用として設備いたしましたもので、美術工藝の展覧会、個人展覧会の小会場として、場所といひ、その設備といひ正に銀座の誇のみならず帝都の誇であります。

此の度新設いたしましたすべてのものは、皆何れも「資生堂」及び「資生堂製品」の名を銀座に行く方々に深く認識され

んことを希ふに外ならないのであります。⁽⁷⁾

資生堂ギャラリーでも、再建後初の展覧会として「銀座回顧展覧会」が開催され、一九二五年には香水「銀座」も発売された。

西にコテイのパーリーがある様に東に資生堂の銀座があります。

銀座をゆききする人々の奏でる交響楽にもいたその匂とその色とその曇形⁽⁸⁾

当時は二大化粧品メーカーとして大阪のクラブ（中山太陽堂）と東京のレート（平尾賛平商店）が並びたっていた。一九二〇年に永井柳太郎が衆議院で行った演説、「西にレーニン、東に原敬首相あり」を振って「西のクラブ、東のレート」と称されている。資生堂は当時、大きく両社の後塵を拝していたものの、信三は「国産の舶来品」の製造を標榜し、国内ではチェインストアとして全国展開を図るとともに、早くから海外進出も考慮していた。華やかな「帝都」銀座のイメージは資生堂が同業他社やデパートなどから差別化しうる最大の要因となっていく。「東京新橋資生堂」から「東京銀座資生堂」への転換は、一九二〇年代の資生堂の急速な拡大の起点に位置するものでもある。イメージを重視する海外のプレミアム・ブランドに目を転じて、これほど都市のイメージを自社イメージ

と重ねて強力に意識し、都市計画にまで先導的に参与した例は稀である。

化粧品の開発と同時に都市計画までも視野にいれ、包括的な企業イメージの構築を推進したところに福原信三の独自性があり、資生堂のブランド力の原点を見ることができる。

注

- (1) 『企業』一九四一年十月号
- (2) 山本拙郎「銀座建築印象記」安藤正輝編『銀座』第二号、銀座社、一九二五年、七一八頁
- (3) 外部のものではジャーナリストイックな観点からの著作やエッセイが大半となっている。
- (4) 和田博文監修『資生堂』ゆまに書房、二〇〇六年
資生堂関係者以外による二冊は下記のとおりである。島森路子『銀座物語 福原義春と資生堂文化』毎日新聞社、一九九六年。夏堀正元『銀座化粧品館』日本経済新聞社、一九七六年。
- (5) 富山秀男監修『資生堂ギャラリー七十五年史…一九一九～一九九四』求龍堂、一九九五年
- (6) 佐々木聡『日本の流通の経営史』有斐閣、二〇〇七年
- (7) 銀座史との関係においては『資生堂社史…資生堂と銀座のあゆみ八十五年』（資生堂、一九五七年）が、当時の関係者の証言も含めてもっとも詳細に記されている。

- (8) 煉瓦街完成初期の銀座については野口孝一や三枝進による研究がなされている。野口孝一『銀座煉瓦街と首都民権』悠思社、一九九二年。三枝進「ウォートルスの経歴に関する英国側資料に関して」銀座文化史学会編『銀座文化研究』第六・七・八号、一九九一～一九九二年

(9) 例えば『読売新聞』一八七八年八月一日号には松本良順の本町資生堂への訪問日が記されている。資生堂が松本の診察日の新聞広告を出している例もある。

- (10) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、一一四頁
- (11) 石橋友吉『東洋大都会』服部書店、一八九八年、七一頁。同じ頁には「室町資生堂」も「薬種問屋にして又神薬の本舗たり」と紹介されている。
- (12) 松本順吉『東京名物志』公益社、一九〇一年、二二八頁
- (13) 最初の生命保険会社は明治生命保険会社であり、創業は一八八一年である。
- (14) 『東京朝日新聞』一八九六年三月三日号
- (15) 松崎天民『銀座』筑摩書房、二〇〇二年、七八頁
- (16) 三田村鳶魚「江戸よりも東京」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二一年、二三頁
- (17) 当初は東京市中中の家屋を漸次、西洋風耐火煉瓦に改築する計画があった。
- (18) 煉瓦街建造当時は公孫樹や桜も植えられていたが、銀座が湿地のため相性のよい柳のみが残った。
- (19) 風俗画報臨時増刊『新撰東京名所図会 第十九編 京橋区之部

巻之一』一九〇一年、二四頁。新橋芸妓については次のように解説されている。

「お役所や、官邸の築地辺に、簡単軽便の候補者を物色したのが、所謂今日の新橋藝妓のそれである。粉黛施して濃く柳眉描いて厚く、粧飾華麗を重んずる新橋の妓風は西国武士の成上がり、明治政府の役人たる彼等の意を迎へんとして養成せられたるものである」(一一頁)

(20) 『経済マガジン』一九四〇年六月一日号

(21) 三田村鳶魚編『伸び行く銀座』銀座二丁目会、一九四二年、三〇三頁

(22) 外国人向けの最初の本格的なホテルである築地ホテル館も建造されていた。

(23) 三田村鳶魚「江戸よりも東京」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二二年、一九―二三頁

(24) 福原有信「銀座の私の店」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、一九二二年、一五五―一六〇頁

(25) 岩動景爾編著『東京風物名物誌』東京シリーズ刊行会、一九五一年、一二三―一二四頁

(26) 谷澤鞆店の当主が「皮包」として販売していた鞆に対して便宜的に「鞆」という漢字を宛てたところ定着したという。

(27) 資生堂宣伝部編『資生堂宣伝史』資生堂、一九九二年、四五頁

(28) 現在コロンビア大に薬学部は存在しない。

(29) ニューヨークでは後に経営を任せられ、参議院議員ともなった松本昇、画家の川島理一郎らと交友を結んだ。同時代の海外滞在経

験者は帰国するとしばしば銀座に集い、このネットワークが第一次大戦後の銀座全体の興隆を支えている。

(30) ポーラ文化研究所『モダン化粧品史 粧いの80年』ポーラ文化研究所、一九八六年、二九頁。当時最大のメーカーのひとつ、レト化粧品(平尾賛平商店)の生産量は一九一五年から二〇年の間に八倍に至っている

(31) 安藤正輝編『銀座』二号、銀座社、一九二五年

(32) 『資生堂社史・資生堂と銀座のあゆみ八十五年』資生堂、一九五七年、一一六―一一七頁

(33) 京新連合会「東京市長男爵後藤新平閣下宛請願書」一九二一年五月

(34) 『読売新聞』一九二二年五月十五日号

(35) 『実業之日本』一九一六年一月一日号

(36) 福原信三「銀座の編輯について」三須裕編『銀座』資生堂化粧品部、三五一頁

この後、福原信三の同書からの引用については特に注記を設けない。なお『銀座』の編集にあたっては慶應義塾大学文学部で学んだ信三の弟の信辰(路草)を通じた交友関係も大きい。

(37) 『読売新聞』一九二二年八月二日号、『同』一九二一年十二月二十四日号

(38) 「追憶の銀座」(資生堂意匠部編・代表高木長葉『御婦人手帳』資生堂、一九二七年、一一五頁)。銀座の景観への郷愁は度々述べられている。

「この建築様式の各々統一されて居た事、青々とした柳、赤い煉瓦

の舗道、青白い四角な瓦斯灯が銀座の特徴でありました。一度橋を渡つてこの一廓に入りますと、一二等煉瓦の別はありましたが、裏通りに却つて昔の面影がありますので、何処にも一種異つた空気が流れて居るのでした。

- (39) 初田亨が銀座の街並みの変遷のモデルを明瞭に作成している。
初田亨「銀座・中央通り 街並み立面図」三枝進ほか『銀座 街の物語』河出書房新社、二〇〇六年、三三―四〇頁
- (40) 新橋は貨物専門の駅となり、近隣地に汐留駅が出来た。
- (41) 高浜虚子「丸の内」『大東京繁昌記』毎日新聞社、一九九九年、八頁
- (42) 岸善四郎編『東京土産』山本常次郎刊、一八八三年。東京の名所として「新橋ステーション」と「銀座の電気灯」が描かれている。
- (43) 奥野信太郎「若き日の銀座」高見順編『銀座』英宝社、一九五六年、一〇頁
- (44) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、一二五頁
- (45) 松崎天民『銀座』筑摩書房、二〇〇二年、八二頁
- (46) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、八四頁
- (47) 村島帰之『カフェー 歓楽の王宮』文化生活研究会、一九二九年
- (48) 岸田劉生「新古細句銀座通」『大東京繁昌記』毎日新聞社、一九九九年、一一八頁
- (49) 今和次郎編纂『新版大東京案内(上)』筑摩書房、二〇〇一年、一九九―二〇〇頁
- (50) 野村益三『東京見物』帝都教育会、一九二九年、一四五頁

- (51) 小野田素夢『銀座通』四六書院、一九三〇年、一〇頁
- (52) 徳田秋声『縮図』小山書店、一九四七年、三頁
- (53) 川村徳太郎述『新橋を語る』新橋芸妓屋組合、一九三二年、二〇四―二〇五頁

- (54) 今和次郎『考現学入門』筑摩書房、一九八七年、九七頁
- (55) 福原信三『立体化した銀座』『文藝春秋』一九三一年八月
- (56) 京新連合会「東京市長男爵後藤新平閣下宛請願書」一九二二年五月
- (57) 福原信三「銀座の新装」安藤正輝編『銀座』創刊号、銀座社、一九二五年、一―三頁
- (58) 福原信三『身邊風景』資生堂、一九三〇年、五八―五九頁
- (59) 『東京日日新聞』一九二四年一月十六、十七、二十七日号
- (60) 三田村鳶魚編『伸び行く銀座』銀座二丁目会、一九四二年、
- (61) 高橋重吉編『帝都復興史第貳卷』興文堂書院、一九三〇年、一一二―一一五頁
- (62) 懸賞写真の審査員は近新三郎、佐藤功一、成沢玲川、福原信三、有島生馬、板垣鷹穂、秋山徹輔、田野泰弘、池谷慶太郎、石原憲治の十名である。
- (63) 『新宿の将来を語る座談会』『都市美』第十三号、都市美協会、一九三七年
- (64) 矢部信壽による石原憲治へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (65) 切り抜きのため、新聞名と発行日の一部不明。一九二八年五月(新聞番号一六一三八号―一六一四四号)

- (66) 矢部信壽による岩松正智へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (67) 矢部信壽による藤井貞寿へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (68) 資生堂意匠部編・代表高木長葉『御婦人手帳』資生堂、一九二七年、一三三頁
- (69) (65)に同じ
- (70) 奥野信太郎「若き日の銀座」、高見順編『銀座』英宝社、一九五六年、一五―一六頁
- (71) 信三は手ごろな価格の洋風家具の一般化に向けて宮沢家具店と協力している。
- (72) 『資生堂月報』一九二四年十二月三日号
- (73) 矢部信壽による前田健二郎へのインタビュー速記録、資生堂企業資料館蔵
- (74) 吉田健一『乞食王子』新潮社、一九五六年、二〇三頁
- (75) 岩田専太郎「銀座漫想」、『資生堂社史・資生堂と銀座のあゆみ八十五年』資生堂、一九五七年、二二三頁
- (76) 日本ディスプレイデザイン協会企画編集委員会『銀座のショーウィンドウ…一三〇年のデザイン文化史』六耀社、二〇〇四年、二七頁
- (77) 『チェーンストア』一九二八年五月号
- (78) 『資生堂月報』一九二六年三月号